
Board Last World

君の愛したこの世界は

櫻庭 稜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Board Last World 君の愛したこの世界は

【Nコード】

N0273Y

【作者名】

櫻庭 稜

【あらすじ】

どうしてこうなった、から始まった俺の物語。

謎の高校生失踪事件、そんな物騒な噂が蔓延する中で、俺は病院に居た。事故により意識を失った状態で、その白いベッドに横たわる君。君が目を覚ます事は二度とない。なら、どうする？ 俺に出来るのは見舞いに来る事だけ。何時も通り、見舞い、さあ帰りましょうか？ 直後、俺は終わった。いや、主に命が。風を浴びに外に出て僅か24秒、俺は連続殺人犯に手により、殺されてしまいま

したとき、まる。どうしようもない終わり方だね、これは。さてさて、俺、死んだんだな。じゃあ天国で極楽を 無理でした。さあ三途の川を渡ろうと思った途端、肩を捕まれ自称超美少女の神様に『手伝って』と言われ、異世界へと召喚される事となる。異世界？所詮RPGみたいにご都合主義なんだろう？ とかどうとか思ってたら……？

（ 残酷な描写、表現、卑猥な表現、描写が登場します。苦手な方は即座にバックブラウザ ）

（ 文章が稚拙克、能力の性能がチートの為、暇潰しにでも読んで貰えれば幸いです ）

ついでに、投稿が深夜になる場合と、昼間になる場合がありますが、ご了承ください。

主要舞台用語紹介（前書き）

今回は舞台と内容の用語を紹介致します。
では

主要舞台用語紹介

「ラグティヴェニア」

主人公の召喚された異世界。

国家群が集まり、成り立つ世界なのだが、国家同士の密着率が高い為に、戦争や紛争が絶え間ないと言う。主に『アクトセリア』『ヴェディリンデ』『フォルセティ』『リアンタイン』の4国が主力国家となっている。それぞれが覇権を相争い、日々論争や、戦争を繰り返している。

「滅望戦争」

民を疲弊させ、土地を衰えさせながらも絶える事のなかった戦争。そのまま争乱が続けば、文明は衰退し、人の歴史が終焉を迎えていたかもしれないと呼ばれる程の戦争で、それを終わらせたのが主人公同様、神によって召喚された異世界人だと言う。

異世界人の名は伝承に未だに残っている？サジ？と呼ばれる異世界人。破滅に向かいつつあった暗黒時代を終わらせ、表舞台では『霸王』と称される程の人間だったと言う。

「エグド二連邦」

サジの築いた平和を願う連邦。

『ラグナカルタ』『リアイン』『アシニア』の三大陸にまたがる巨大国家を築き上げ、これを長く戦の起こらぬ繁栄の時代として『エグド二連邦』と呼んだ。

「破魔晶」

元々サジの持った人智の及ばぬ力。

神より授かりし力とも称され、空想の産物とも呼ばれている代物。魔を破る水晶との事だが、実際にその姿を見た者は今では居らず、

本当にそれが存在しているのかどうかも不明らしい。

「アクトセリア帝国」

全土に覇を唱える東の軍事大国。

覇権を争そう大国の一つで、ラグティヴェニア東部の大半を領有する強国。元々はエグド二連邦の都市国家の一つに過ぎなかったが、共和制、帝政と政治形態を変える過程で本格的な軍事大国と化した。建国当初から協議制が根付いている為、国内の法制度は先進的合理的。階級差別が存在する物の、人々の生活水準は概ね高い。しかし、人種差別と、奴隷制度は貴族間でのみ激しく、差別意識が残っているのが欠点とも言える。

「ヴェディリンデ王国」

霸王の血統を継ぐ小国。

霸王サジの次男シアテムがヴェディリンデ家を興したのを発祥とする、由緒正しい国家。霸王の遺産の一つである『契約の剣』を代々受け継ぐ。三つの大陸が接する要地エドニア半島一体を納めている為、狭く痩せた土地を領土とするが、生活水準は極めてく、経済的にも潤っている。現在状況としては、アクトセリアの属領と化している。

「フォルセティ王国」

ラグティヴェニア西部に位置する王国。始祖は霸王サジから『覇盟の破片』と言う魔石を受け継いだ三男のカルツ。王の次男シアテムを始祖とするヴェディリンデとは兄弟国である。

豊かな土壌と豊富な資源を活かし、農工行を主産業として堅実な道を歩んでいるのだが、アクトセリア帝国が力を増すに連れ、その進歩が懸念されてきた。それにより、二年前にヴェディリンデと同盟を組み、互いに危機の場合、援護援軍を行うと契約も交わした。

「リアンタイン帝国」

覇権を狙う南の大国。アクトセリアやフォルセティ、ヴァディニリ
ンデとはまた違った考え方を持つ大砂海と樹林地帯を越えた先に存
在する帝国。大陸中央に広がる肥妖な平野部を領土とする。『領庭
軍』と呼ばれる軍隊を所属しており、それは一番大きな領土を所持
或いは治めた物が継ぎの皇帝となると制定された特殊軍隊。領土の
変動が激しい戦時下に置いては帝位が動き易い。

「空中国家エディタル」

海上空に浮かぶ空中国家。自治都市として存在し、規模は小さいな
がらもラグティヴェニアの情勢に大きな影響力を持つ自治都市。エ
グド二連邦時代に侯爵となつてこの地を授かつたオクトール家が、
代々統治を行っている。純粋で良質な魔石の産地であり、この地に
古くから住む『兔耳族』の知識も取り入れた事で技術立国としても
発展した。

現在は帝国の友好国として見られている。

「港町カルトハイム」

かつての海賊の集う、腕っ節が物を言う町。

古くはラグティヴェニア有数の漁港として栄え、やがて海賊の町に
発展した。アクトセリアの海賊の取り締まりも教化され、住人達が
海運業へと転校としくと共に、次第に海上の輸送や貿易を主産業
とする町に変化している。現在は帝国領に属しながらも、非公式に
自治権を得ている。解放軍、反乱軍、革命軍の三つの特殊軍隊を所
属しており、解放軍は帝国からの解放を、反乱軍は帝国、王国への
反逆への意志を、革命軍は王国、帝国への革命意識を告げる為の軍
隊構造をしている。

第一章登場人物紹介

名前：秋瀬十夜 あきがせ とおや

性別：男

年齢：17歳

出身：埼玉県さいたま市

身長：170センチ

能力：『千の武器を持つ騎士』 『異常なる回復』
セントド ヴァン リヒター アン リカーバル

容姿：黒髪黒眼／初期装備黒い学生服
フレザ

本作品の主人公にして、語り部。

飄々とした、シニカルな言動が特徴的で、炊事洗濯裁縫全てこなせると言う家事スキル持ち。

12歳の時に両親を事故で亡くしてから、一人暮らしをして来た天涯孤独の身。

運動神経、頭脳共に平均より上で、夢は特に無し。

元々剣道部で、有段者だった為に、反射神経と反応速度は半端ではない。

正義感は強いが、実際戦うことを余り好まない。自分の信ずる道を唯進み、卑怯な手でも正義と捉える場合がある何処か脇役巻き込まれ体質。

名前：神様

性別：女

年齢：不詳

出身：不明

身長：155センチ

容姿：金髪碧眼／華奢で白い衣

自称神様。

超美少女でもあり、存在変幻で美人にもなれる存在。

幾億物能力を所持しており、その内『千の武器を持つ騎士』と『異常回復』を十夜に授けた。
上からB81/W54/H78の豊満なボディラインの持ち主だが、これは変幻時の美人の時のみ。
普段はツツコミ役だが、冷静沈着な一面もあり、説明下手。自分の説明より、説明書を手渡したりする本格的説明下手。実際ホログラムでしか現れる事が出来ないのが難点らしい。

名前：リーラ^リゲシユタルト

性別：女

年齢：16歳

出身：アデント

身長：152センチ

魔法：疾風系魔法^{ワイエント}

容姿：淡い紫銀髪紫目/ボロ布

自分の暮らしていた村が壊滅し、生き残った一人の少女。

盗賊に奴隷として買われた身分で、疾風魔法を得意とする。

真面目克冷静な判断を取れる戦略化で、頭も運動神経も良い。

華奢で小柄だが、ボディラインは綺麗。

名前：エトナ^ニシユヴェルト

性別：女

年齢：17歳

出身：アクトセリア帝国

身長：155センチ

魔法：雷光系魔法^{ブリツァ}

容姿：赤髪短髪赤目/動き易い軽量鎧

アクトセリア騎士団、通称『黒十字騎士団^{セスヘ}』と呼ばれる騎士団の第

5部隊と呼ばれる実質陸戦向き部隊に所属する女性。

父親を殺した男を捜しており、実際見付ければ騎士団を辞めるつも

りでいたと言う。

運動神経や頭は並々だが、魔法力と剣撃力が高く、並大抵の騎士では吹き飛ばされる程。

甘味料が好みで、酸味は嫌いだと言う浅はか過ぎるツンデレガール。

名前：シュトラーク・ヒューペル

性別：男性

年齢：28歳

出身：アクトセリア帝国

身長：188センチ

魔法：大地系魔法
エアティバーベン

容姿：茶髪茶目 / 騎士団重鎧

エトナとは違い、第2部隊と呼ばれる実質陸戦空戦向き部隊の部隊長。

信頼高く、人望もある存在だが、国の為なら命も投げ出し、仲間ですえ殺す『冷鬼のシュトル』とも呼ばれる程の人材。

運動神経、頭は良く、逆に魔法力が低い。

十夜を異端者として認め、殺そうとした始めての存在。

どうしてこうなった（前書き）

はい、本当にどうしてこうなったんでしょうかね？

実際自分、今何やら大変な事になってますです、はい。さてさて……、それではまずは今回の作品について。

今回もまた異世界トリップ物。

ですが、今作品は主人公〓最強ではありません。

まるで『アーチャー』の様な主人公です、はい。

では、どうぞ！

どろしてごろなった

ふわりと、花の香りが流れ出した。

室内の証明は落ちている。窓から差し込む月明かりが、ほのかに病室を照らしている。

病室は、普通中央を大きなカーテンが仕切っている。しかし、この病室は違う。

緑色の床に散乱する様々な太さと色を持つ線コードの類と、君の眠るベッドを囲む様に設置された電子機器がそれを如実に示している。

線が君の命を繋ぐ証だとすれば、電子機器はその命を制御する為の物だろう。

心拍、血圧、体温、脳波、血流、酸素、全てを計測する装置。

装置から伸びる線は、君の体の様々な部分に繋がり、全てをデータにして、今、俺に物語る。

「今夜も眠り姫かい……？」

俺は線を踏まない様に越え、彼女の眠るベッドに歩み寄った。

「君は今、どんな夢をみてるんだい？」

君に近付くと、鼻を刺す様な消毒液の匂い。乾いた布の日向臭い匂い。果実の甘い匂いが一変に鼻孔に流れ込んで来る。

「俺はね、昨日、君とデートしてる夢をみたよ。夢の中でしかデート出来ない何て、実に滑稽こっけいだよね」

苦笑を零してから、額に手を添え、クリーム色の天井を仰いだ。

「ねえ、君はこの世界は好きかい？」

幾ら問い掛けても、返答が来ないのは解っている。

「俺は嫌いかな。大嫌いかも」

解っていても、投げ掛け続ける。

「ねえ、もし俺が死んだら、君に出逢えるかな？」

君の意識を、君の想いを彼岸に飛ばしたくないから。

「君に、触れられるかな？」

目を閉じて、苦笑より歪んだ、壊れ掛けた様な笑みを零してから、俺は尋ね続ける。

「君を、愛せるかな……？」

問い掛けは、静寂と沈黙に支配されたこの空間の中で反響し、乱舞し、消え去った。

「はは、冗談だよ。じゃあ俺はそろそろ行くね、また明日来るよ」

ベッドから腰を下ろせば、線を越えて、ポケットに手を突っ込んでから歩み始める。

「また、明日ね……」

ポケットから手を出し、カードを出せば、メタルプレートのスリットに差し込む。

インジゲージの色が変わり、モーター音と共にドアが開いた。

「さあ、帰りましょかね」

冷え込む夜とは正反対に、病室は春の陽気の如く暖かった。

「温度差を此処で感じるよな」

レザージャケットでも着て来れば良かった、と今更後悔してから、階段を下り「失礼します」と言っつて、俺の脇を忙しそうに駆け抜ける看護師達の背を見送る。

「ホント、此処の病院は遅くまで忙しい事だ……」

俺は、お疲れ様です、と心の中で呟いてから、エントランスの中央を歩み、観音開きを開く硝子扉が完全に開いた後で、冷たい風の吹き抜ける外に歩み出る。

「もうクリスマスかあ……、今年は誰と過ごすかね」

まだ降る事は無いが、もう11月後半。

そろそろ降っても可笑しくは無い月ではある。

「こんな事言つてたら君に怒られちゃうか」

白い息を吐きながら苦笑を零せば、俺は藍色の空を見上げた。

「今夜は空気が澄んでるな……、星が綺麗だ」

ほう……、と白い息を吐いて。

ドスツ……!

「……はい?」

痛い。

「……え、ちょ……、え?」

痛い。

「……、勘弁、してくれ、よ……」

俺は痛みの走る場所に触れ、その触れた手を正面へと持って来る。

「……、災難、いや……」

紅色の染まった手の平。

「どろどろしてこなくなった……」

其処で、俺の意識は彼岸に飛んだ。

どうしてこうなった(後書き)

どうでしたでしょうか？

唐突過ぎましたか？

さて、君は誰何か？

ではでは、次回！

俺と神様と召喚と(前書き)

如何でしょうか？ 序章は。

さてさて、第一章突入。

主人公の十夜君、漸く異世界突入！！

さてさて、どうなるのでしょうか？

では、どうぞ！

俺と神様と召喚と

目を覚ました瞬間、違和感を全身に覚えた。

理由は、数秒後に判明する。空が一面、薄く赤味を帯びた金色に染まってる。

確か、夜だった筈だ。^{ハズ}

確か、深い、深い藍色だった筈だ。

いや、そんな事よりも何よりも。

「俺……、生きてる、のか……？」

そう、俺は殺された筈なのだ。

それなのに、俺は今、此処で寝そべっている。

「何、で……、いや、それよりも、此処は、何処だ……？」

疑問と言う疑問が頭の中に膨らんでは、消え去って行くのを感じながら、俺は上半身を起こした。

金色の空の次は、桃源郷の如き景色が広がっていた。

一面に色取り取りの花が咲き乱れ、透き通った川がその花畑を両断する様に流れている。

本当に此処は何処なんだ……？

と、暫く黙っていると、肩に手を置かれた。

「ッ?!」

俺は驚いて、肩を跳ねさせてから振り返る。

驚きは二連続だった。

俺の視界に飛び込んで来たのは。

「ちょ、つと……、そんなに驚かなくても良いんじゃないかなあ……」

金色の長い、空の色に似た髪の色をした、超美少女だった。

年齢的には俺と然程さほど変わらない位、身長も女子ならば平均的身長。

苦笑混じりに尋ね掛けて来る、その時に漏れた声は割りど幼い声。
「で、君は此処に何で居るのかな？」

小さく首を傾げる様子に、グツと来てしまおうが、それは心の内に留めて置いて、苦笑し返す。

「いや、それは俺が今一番聞きたい事何ですけどね……」

その言葉に、彼女は「そう」と頷いてから「実は君の情報はもう入ってるの」と、その碧眼を据^すえて、真剣な瞳になってから告げて来る。

「入ってる……？」

じゃあ何か？ 此処は秘密結社のアジトが何かなのか？ 個人情報まで仕入れられる何て普通じゃない。秘密結社でも中々……。

「ええ、君、名前は秋瀬十夜君よね」

「え、あ、はい……、はい、そうです」

名前は知られていた。

「年齢は17歳、高校二年生ね。元々剣道をしてたみたいだけど、辞めてるわね。今。それで、今は君の眠り続ける病院へと通い詰めの状態、と」

それ所か、年齢も、学歴も、特技も、現在状況もまた、知られていた！

「全部、はい、有ってます」

俺はそう頷いてから「でも何で？」と首を傾げる。

「それは簡単よ」

「簡単、ですか？」

一体どんな方法を使っているだろうか？

しかし、放たれた言葉は、俺を驚かせる所か、ぶっ飛び過ぎてて、対応のし様がないと言える答えだった。

「私が神様だからよ」

な？

ぶっ飛んでるだろう？

神様？ 誰が？ 貴方が？

「……………」

真顔のまま硬直した俺に、自称神様は「あー、信じてないな」と頬を膨らませて来る。

一々動作が可愛らしいな、まあそれも心の内に留めて置いて「信じられる訳無いでしょう」と溜め息を吐く。

「どうして？」

今度は先程とは逆に、小さく首を傾げて尋ねて来る彼女に俺は肩を竦めて「俺、無神論者ですから」と告げる。

「あらら、でもね私は本当に神様。だって普通あそこまで君の事知れると思う？」

「ストーカーなら」

「私はストーキングする程恋した事ないしね」

いや、それより神様、恋するの？

「本当に本当に？」

「本当に本当に」

「本当に本当に？」

「本当に本当に」

あれ、何だか言葉遊びみたいになって来たぞ。

「本当の本当の本当の本当に？」

「本当の本当の本当の本当に」

「……………」

俺は頷いてから、目を静かに閉じる。

「信じてくれた？」

「まあ、一応……………」

「良かったあ、これで怒られなくて済むよ」

「怒られなくて？」

何だ何だ？ 怒られるって。

「実はね、君に折り入って頼み事が有るんだよ」

「頼み事？」

「うわあ、嫌な予感しかしない……。」

「うん、それはね君に異世界に行って貰いたいんだ」

「……異世界？」

怪訝そうに眉を潜める俺に、神様は「うん」と頷いてから「実はね」と続けて語り出す。

「世界はね、神様の中でも一番偉い神様、まあ神王って呼ばれてる人が創るんだけどさ、でも神王は創るだけ創って後は何も手は出さないんだよね」

「つまり、創った後は自由と？」

「まあ、そうとも言えるかもね」神様は頷いて「でもね、後は私達の仕事。世界に命を与えるんだよ、地球みたいにね」と続ける。

「命……」

俺は胸に手を当てる。

「そう、命。で、命は次第が増えて、地球みたいに法律とか、憲法とかを造り出す」

「成程……」

「でもね、地球みたいに賢い世界は中々無いんだよね」

「賢い？」

俺は首を傾げる。

「地球は最高傑作だからね。幾百の戦争の末に平和が訪れるって言う王道を歩んで来た最高傑作。」

でもね、他の世界は憲法がなかったり、戦争が長く続いたり、未だに奴隷制度がある場所もあるんだよ？」

頷いては、顔を顰^{しか}め「其処で！」と俺に人差し指を向けて来る。

神様、人は指差す物では無いッ！

「君に世界改変して貰いたいのだ」

「世界改変ねえ……、世界、へ?!？」

いや、御免。無理、結論から言っちゃうけど、無理。

無理に決まってるわ！ 世界改変が出来る高校生が居ると思うか

！ そんなのライトノベルの中だけだわ！！

「無理だと思っでしょ？ でもね、出来るんだよ」

「どうして？ その根拠は？！」

思い切り断りたい。

だが、次の、神様の理由を聞いた瞬間、断れなくなった。

「だって、君だもの」

何て、理由だろう……。

此処まで馬鹿らしい理由は始めて聞いた。

「君なら出来る。私信じてるよ？ 君の可能性を」

「可能性……」

「そろそろ主人公しようよ、脇役じゃあなくてさ」

快活な笑みを浮かべて「ね？」と首を傾げて来る神様に俺は遂には折れて、苦笑を漏らしてから「解った、解った解りましたよ、遣れるだけ遣って遣ろうじゃないですか」と答えてしまう。

「やったッ！！ 嗚呼、そうだそうだ。流星のこのまま行くのは辛いと思っただから、君にお似合いの能力を授けて上げる」

ピョンピョンと、まるで幼い子供の様に跳ねて喜んだ後で、俺の方を振り返って、そう告げて来る。

「能力？」

あれか？ 最強の規格外能力か？

それなら楽何だけどね。

「君に今授けた能力は『千の武器センドを持つ騎士リヒター』と『異常なる回復アンリカーバル』の二つだよ」

「何だ、その能力……？ てか、今？」

「うん、今授けた。試しに適当に武器を想像して御覧？」

「武器……、ねえ」

俺は顎に手を添え、暫く悩んでから、右手を横に投げ出し、想っ。刹那、手中に光の粒子が凝縮され、一本の刀を形作る。

「へえ、日本刀かあ……、良い趣味だね」

「だろ？ 俺刀好きだから」

ニヤリと笑う神様に、俺は笑みを零してそう返してから「でもどうやってその異世界とやらには行くんだ？」と首を傾げる。

扉とか？ 穴とかかね？

「簡単簡単。あ、それと聞きたい事があったり、助言が必要なら携帯で000ってやってみて？ 出るから」

「神様携帯使えるの?!」

「使える使える。着信拒否とかモ ゲーとか遣りまくり」

「神様スゲー！」

てか着信拒否遣りまくっちゃ駄目だし、モ ゲー遣るのも大概にしとけよな!?

「じゃあ行こうか」

「どうやって?」

「こうやって」

スッ、と俺の足元が無くなった。

「……………へ?」

「アディオス」

「嘘だろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお!?!?!?!?!?!?!?!?!」

俺は落ちて行く……。

声は漆黒の闇の中に反響し、乱舞し、そして。

無
く
な
っ
た
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0273y/>

Board Last World 君の愛したこの世界は

2011年10月30日00時12分発行